

友人関係と家族関係が大学生の対人的疎外感に及ぼす影響

— 対人的疎外感の主観的幸福感への影響を含めた検討 —

武 富 美那子¹⁾・徳 田 智 代²⁾

要 約

本研究では、友人関係と家族関係が大学生の対人的疎外感に及ぼす影響について、対人的疎外感が主観的幸福感に及ぼす影響を含め検討した。大学生213名(男性78名, 女性135名)を対象に、対人的疎外感, 現実と理想の友人関係, 家族機能, 主観的幸福感についての質問紙調査を行った。共分散構造分析の結果, 現実の友人関係の良好さが対人的疎外感に負の影響を及ぼし, 対人的疎外感が主観的幸福感に負の影響を及ぼしていた。家族機能から対人的疎外感への負の影響も見られたが, 影響力は小さかった。大学生において, 現実の友人との付き合いが良好でないと対人的疎外感が高くなり, 対人的疎外感が高いと主観的幸福感が低くなることが示された。

キーワード: 対人的疎外感, 友人関係, 家族機能, 主観的幸福感, 大学生

宮下・小林(1981)は、疎外感を「集団生活や社会生活の中で自分が他者から排除されている, あるいは他者との間に距離感・違和感を感じて, どうしてもなじめない, とけ込めないという認知的感情」と定義している。宮下・小林(1981)は、非行傾向のある中学生と一般の中学生において、非行傾向のある者の疎外感が有意に高かったことから、「疎外感が問題行動を惹起させる素因となり, そうした不適切行動が, 疎外感をますます増長させる」と想定できるとしている。また, 西野(2007)は、小学6年生と中学生への調査で, 学校のみならず溶け込めていないと感じたり, クラスで受け入れられていない気がしたりするといった学級での疎外感が, 不安や抑うつを促進させることを指摘している。

杉浦(2000)は、宮下・小林(1981)を基に、「社会や周囲の人との関係の中で生じる疎外感」を対人的疎外感と定義した。そして、宮下・小林(1981)の疎外感尺度の「孤独感」因子と「圧迫拘束感」因子及び女子学生へのイ

ンタビューを基にして、対人的疎外感尺度を作成している。さらに、その対人的疎外感尺度を用いて、杉浦(2000)は拒否不安と親和傾向という2つの要素からなる親和動機と対人的疎外感との関係について検討を行った。その結果、拒否不安が高いと対人的疎外感が高く、親和傾向が高いと対人的疎外感が低いことが示された。すなわち、相手から拒否されて一人になることを避けようとする拒否不安が高いと、自分を押し殺して表面的な付き合いになってしまい、対人的疎外感を高めるが、自分らしさを出して他者と親しくなりたいという親和傾向が高くなると対人的疎外感が低くなるといえる。

対人的疎外感と愛着スタイルの関連について中学生を対象に調査した永田・緒賀(2010)は、自己観・他者観がともにポジティブな安定型と比べ、自己観はポジティブであるが他者観がネガティブな拒絶型、他者観はポジティブであるが自己観がネガティブなとらわれ型、

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

自己観・他者観がともにネガティブな恐れ型の者の対人的疎外感が高いことを見出している。そして、自己観、他者観、回想された親への愛着が対人的疎外感に負の影響、回想された分離不安と現在最も親しいと思われる同性の友人との心理的距離が対人的疎外感に正の影響を及ぼすことを報告している。すなわち、対人的疎外感を高めないためには、幼少期に良好な親子関係が築けていること、自己観、他者観がポジティブなこと、友人との心理的距離が近いことが重要であるといえる。このように、対人的疎外感への影響要因についての研究は見られるものの、未だ数が少ないのが現状である。

では、対人的疎外感への影響要因としてどのようなものが考えられるだろうか。対人的疎外感は、社会や周囲の人との関係の中で生じるとされており、個人の対人関係の在り方や対人関係の認知が影響してくると考えられる。

宮下(1998)は、大学生に最も親しい同性の友人を一人思い浮かべてもらい、その友人のイメージやその友人との関係とアイデンティティの関連を検討している。最も親しい友人のイメージ及び関係における、精神的な安らぎ・相互信頼、社会性、社交性とアイデンティティに正の相関が見られ、友人関係で精神的な安らぎや相互の信頼を得ていたり、社会性や社交性の高い友人がいたりするといった友人関係の在り方とアイデンティティが密接に結びついていることを指摘している。良好な友人関係はいつの時期にも重要であろうが、様々な側面での激しい変化があり、アイデンティティの確立が課題となる青年期は、なおさら良好な友人関係が重要になってくると考えられる。

青年期の友人関係について検討した落合・佐藤(1996)は、青年期の友人関係が浅く広くかわる付き合い方から、しだいに深く狭くかわる付き合い方に変化することを明らかにしている。自己防衛的でみんなと同じようにしようとする付き合い方から、自己開示し積極的に相互理解しようとする付き合い方になっていくという。

一方で佐藤(1995)は、高校女子の友人関係において、特定の友人とグループでいる理由として、浮いた存在になることの忌避と複数からの安全保障の獲得を挙げている。前者は、グループでいないと周囲から浮いているように見えるから、ひとりぼっちな人だと思われたくないからといった消極的なものであった。このような消極的な理由で築かれた友人関係では、浮いた存在にならないように周りに合わせてうまく関係を保と

うとしていることも考えられ、友人との関係の中で疎外感を感じていることもあるのではないだろうか。

吉岡(2001)は、「自己開示・信頼」、「深い関与・関心」、「共通」、「親密」、「切磋琢磨」の5因子からなる友人関係測定尺度を作成し、こうであってほしい、こうでありたいと思う友人との付き合い方と日頃の友人との付き合い方を評定している。こうであってほしい、こうでありたいと思う理想の友人関係と日頃の友人との付き合い方である現実の友人関係の差が大きい者は、差が小さい者に比べて、友人関係の満足感が低いことを指摘している。理想と大きく差のある友人関係の中では、対人的疎外感を強く感じやすいと考えられる。

ところで、青年期を取り巻く対人関係は友人関係だけではない。様々な集団に属し、多様な関係を築いていると考えられるが、生まれた時から共に過ごしてきた親を含む家族との関係も青年期には重要な対人関係であると考えられる。宮下(1994)は、両親の養育態度と家庭の雰囲気形容詞対の尺度を用いて測定し、両親の養育態度と家庭の雰囲気が大学生の疎外感に影響を及ぼすことを指摘している。

家族関係に関する指標として、家族機能がある。西出・夏野(1997)は、中学生とその親に質問紙調査を行い、中学生自身の家族システム機能のポジティブな認知的評価が、抑うつ感を低下させることを示した。また、鈴山・徳田(2009)は、高校生への調査から、家族システムの機能状態を良好であると認知していることが不安の減少につながると指摘している。家族機能は、家族のまとまりや家族の役割の柔軟性を測る尺度であり、このような家族機能の認知が対人的疎外感に影響するのではないか。

また、対人的疎外感が主観的幸福感に及ぼす影響についても検討したい。伊藤・相良・池田・川浦(2003)は、従来の心理学では健康を捉えるうえで病理的な側面やネガティブな側面に焦点を当てることが多く、ポジティブな側面が軽視されてきたことを指摘している。また、肯定的な側面に焦点を当てた研究についても、QOL(Quality of Life)の観点から、従来盛んに行われてきた高齢者を対象とした研究のみならず、全ての世代で必要となってきたと指摘している。以上より、本研究では、主観的幸福感を精神的健康の指標として用いることとする。曾我部・本村(2010)は、大学生において、身近に何でも相談できる人がいるなど人間関係における親密性が高い者は低い者と比べて主観的幸福感が高いことを示し、人間関係における親密性が主観的幸福感の規定因の一つであることを見出した。対人的疎外感とは、人間関係

における親密性と同様に、人間関係に関連している概念である。対人的疎外感は、親密性とは反対に、主観的幸福感に対して負の影響があるのではないか。

そこで、本研究では、不適応行動や精神的な健康に影響を及ぼすとされる対人的疎外感への影響要因を友人関係、家族関係から明らかにすることを目的とする。あわせて、対人的疎外感の主観的幸福感への影響についても検討することとし、次の3つの仮説を立てた。

1. 友人関係の理想と現実の差が大きいと対人的疎外感が高くなる。2. 家族機能の凝集性、適応性を低く認知していると対人的疎外感が高くなる。3. 対人的疎外感が高いと主観的幸福感が低くなる。

方 法

調査参加者

A大学の学生222名のうち欠損値を含むデータを除いた213名(男性78名, 女性135名)を対象とした。平均年齢は19.15歳($SD=1.27$)で、年齢の範囲は18歳から24歳であった。

手続き

大学の講義開始前に質問紙を配布し、集団形式で行った。任意で回答してもらい、後日回収した。

質問紙の構成

学年、年齢、性別、居住形態、家族構成を記入してもらうフェイスシートと以下の尺度を用いた。

(1)対人的疎外感尺度 杉浦(2000)の尺度を用いた。1因子21項目について5件法で評定を求めた。

(2)友人関係測定尺度 吉岡(2001)の尺度を用いた。「自己開示・信頼」因子9項目、「深い関与・関心」因子4項目、「共通」因子5項目、「親密」因子5項目、「切磋琢磨」因子4項目の5因子27項目について4件法で評定を求めた。「あなたがこうあってほしい、こうでありたいと思う友だちや友だちづきあいについておたずねします。」という教示文で理想の友人関係を、「あなたの日頃つきあっている友だちや友だちづきあいについておたずねします。」という教示文で現実の友人関係を尋ねた。

(3)家族機能測定尺度 草田・岡堂(1993)の尺度を用いた。「凝集性」因子10項目、「適応性」因子10項目の2因子20項目について5件法で評定を求めた。

(4)主観的幸福感尺度 伊藤・相良・池田・川浦(2003)の尺度を用いた。「人生に対する前向きな気持ち」因子3項目、「達成感」因子3項目、「自信」因子3項目、「人生に対する失望感のなさ」因子3項目の4因子12項目

からなる。4件法で評定を求めた。

結 果

1. 友人関係の理想と現実の差における対人的疎外感

友人関係の理想と現実の差が対人的疎外感の高さに関連するか調べるために、1要因の分散分析を行った。友人関係測定尺度の全ての因子を合わせた合計得点と、因子ごとの得点において検討を行った。理想と現実の差の平均値をカットオフポイントとし、高群と低群に分けて独立変数とし、対人的疎外感を従属変数とした。その結果、友人関係の理想と現実の差高群が低群より有意に対人的疎外感得点が高かった($F(1, 211)=5.33$, $p<.05$, $\eta^2=.03$)(Figure 1)。

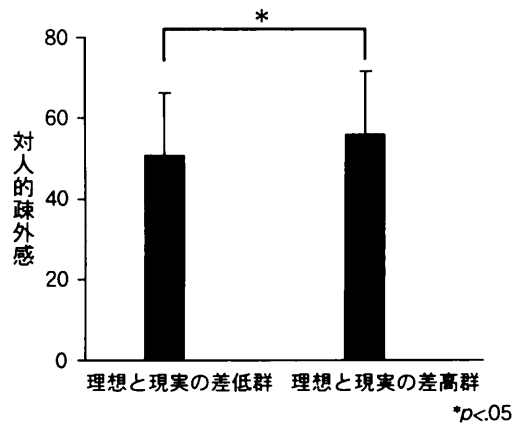


Figure1. 友人関係の理想と現実の差における対人的疎外感

因子ごとでは、「自己開示・信頼」の理想と現実の差高群が低群より有意に対人的疎外感得点が高かった($F(1, 211)=11.65$, $p<.01$, $\eta^2=.05$)。「深い関与・関心」の理想と現実の差の高低によって対人的疎外感得点の高さに有意な差は見られなかった($F(1, 211)=3.47$, ns , $\eta^2=.02$)。「共通」の理想と現実の差高群が低群より有意に対人的疎外感得点が高かった($F(1, 211)=4.47$, $p<.05$, $\eta^2=.02$)。「親密」の理想と現実の差高群が低群より有意に対人的疎外感得点が高かった($F(1, 211)=4.74$, $p<.05$, $\eta^2=.02$)。「切磋琢磨」の理想と現実の差の高低によって対人的疎外感得点の高さに有意な差は見られなかった($F(1, 211)=.75$, ns , $\eta^2=.00$)(Figure 2)。

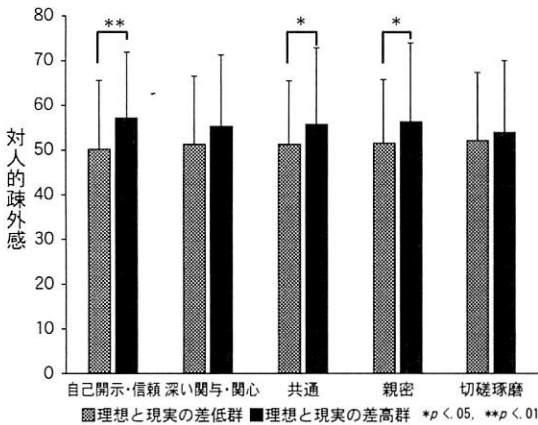


Figure 2. 友人関係の理想と現実の因子ごとに
見た差における対人的疎外感

2. 家族機能の凝集性と適応性の高低における対人的疎外感

同様に、家族機能の凝集性と適応性の高低が対人的疎外感の高さに関連するか調べるために、凝集性、適応性のそれぞれの平均値をカットオフポイントとし、高群と低群に分けて独立変数とし、対人的疎外感を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、家族機能の凝集性、適応性の高低によって対人的疎外感得点の高さに有意な差は見られなかった ($F(1, 209) = 3.25, ns, \eta^2 = .02$), ($F(1, 209) = 2.70, ns, \eta^2 = .01$) (Figure 3)。

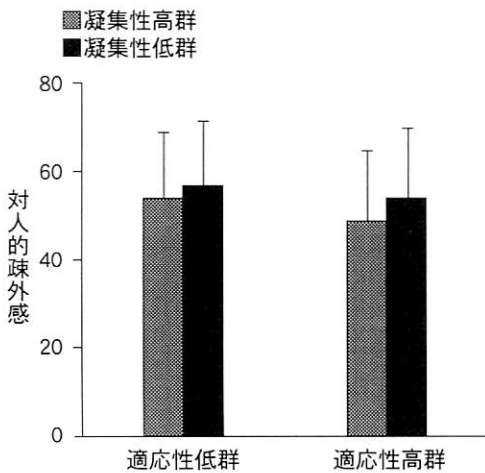


Figure 3. 家族機能の凝集性と適応性の
高低における対人的疎外感

3. 仮説モデルの検討

仮説モデルを検討するためにAmos (Ver.21.0) (IBM) を用いて共分散構造分析を行った。仮説に従い当てはめたモデルを検討したところ、全てのパスが有意であった (Figure 4)。このモデルの適合度は $GFI = .962, AGFI = .939, CFI = .997, RMSEA = .016$ であり、データに対するモデルの適合度は十分高かった。「家族機能」から「対人的疎外感」への係数が $-.33$ であることから、「家族機能」が「対人的疎外感」に負の影響を与えることが示された。「対人的疎外感」から「主観的幸福感」への係数が $-.75$ であることから、「対人的疎外感」が「主観的幸福感」に負の影響を与えることが示された。しかし、「友人関係の理想と現実の差」から「対人的疎外感」への影響については、係数が $.16$ と低かった。

この点について、再度データを見たところ、現実の友人関係得点の値が平均の1SD以上低い者の42%で、理想と現実の差が平均よりも低いことが明らかとなった。このことから、現実の友人関係得点が低い者の中には、理想を低く持っている者が一定数いることが示された。現実の友人関係得点が低い者、すなわち、日頃の友人との付き合いで十分に自己開示できず信頼感を持っていないと感じていたり、相手と深く関わり親密な関係であると感じられていなかったりする者は、友人関係の理想と現実の差が小さくても、現実の友人関係を良好でないと感じ、そのような友人関係の中で対人的疎外感を感じている可能性があるのではないかと考えた。

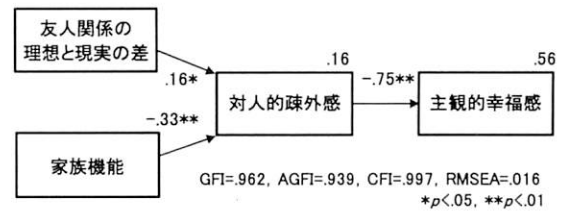


Figure 4. 対人的疎外感への影響要因仮説モデル

そこで、最初のモデルに現実の友人関係を加えたモデルを作り再検討した (Figure 5)。その結果、モデルの適合度は $GFI = .912, AGFI = .874, CFI = .958, RMSEA = .056$ と概ね適合を示した。このモデルでは、「友人関係の理想と現実の差」から「対人的疎外感」へのパスのみ有意でなかった。「現実の友人関係」から「対人的疎外感」への係数が $-.36$ であることから、「現実の友人関係」が「対人的疎外感」に負の影響を与えることが示された。

また、「対人的疎外感」から「主観的幸福感」への係数が-.75であることから、「対人的疎外感」が「主観的幸福感」に負の影響を与えることが示された。「家族機能」から「対人的疎外感」へも負の影響が見られたが、-.21と値が低く、影響力が小さいことが示された。

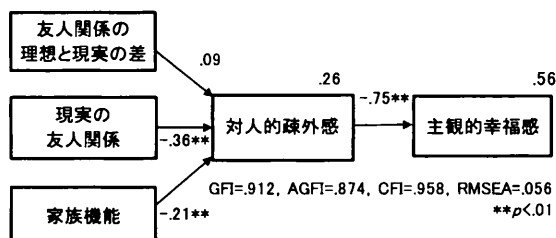


Figure5. 現実の友人関係を加えた再検討モデル

考 察

本研究では、不適応行動や精神的な健康に影響を及ぼすとされる対人的疎外感への影響要因を友人関係、家族関係から明らかにすることと、あわせて、対人的疎外感の主観的幸福感への影響について検討することを目的に質問紙調査を行った。

分散分析の結果、友人関係の理想と現実の差の得点が高い群が低い群と比べて有意に対人的疎外感が高く、「自己開示・信頼」、「共通」、「親密」で有意差が見られた。しかし、共分散構造分析では、有意な影響力が見られなかった。このことから、「友人関係の理想と現実の差が大きいと対人的疎外感が高くなる」という仮説1は完全に支持されたとはいえない結果となった。

すなわち、友人関係の理想と現実の差が大きいは小さい者と比べて対人的疎外感を強く持ちやすいが、差の大きさよりも、現実の友人関係の良好さの方が対人的疎外感に影響することが示された。現実の友人関係が良好でない者において、理想を低く持つ者が一定数存在することが示され、彼らは友人関係の理想を高く持っていないために、理想の友人関係と現実の友人関係のギャップから対人的疎外感を感じることは少ないが、現実の友人関係が良好ではないと感じているために、そのような友人関係の中で対人的疎外感を感じていることが考えられる。

次に、家族機能の認知が対人的疎外感に及ぼす影響について、分散分析及び共分散構造分析の結果、家族機能が対人的疎外感に及ぼす影響は小さいことが示された。このことから、「家族機能の凝集性、適応性を低

く認知していると対人的疎外感が高くなる」という仮説2は支持されなかった。

岡田(1992)は、青年期は両親やその他の大人達の生活や規範に疑問を持ち始め、自分なりのあり方を模索する時期であり、両親よりも同世代の言うことに共鳴すると指摘している。このことから、青年期にあたる大学生は、両親を含む家族との関係に比べ、友人との関係に比重が置かれるため、家族機能の認知から対人的疎外感への影響が小さかったのではないかと考えられる。

最後に、対人的疎外感の主観的幸福感への影響について、共分散構造分析の結果、負のパスが有意であったことから、「対人的疎外感が高いと主観的幸福感が低くなる」という仮説3は支持された。対人的疎外感の主観的幸福感に負の影響を及ぼすため、対人的疎外感を高めないようにする必要があるといえるだろう。

以上のことから、現実の友人関係が良好でないと対人的疎外感が高くなり、対人的疎外感が高いと主観的幸福感が低くなることが示唆された。落合・佐藤(1996)は、大学生は、本音を出し、心をうちあけて話ができて、互いに分かり合えるような友人付き合いをしようとしていると指摘している。友人は単なる行動を共にする仲間ではなく、心理的な支えとなるような深い関わりを持つ相手になると述べ、その相手との根底には相互の信頼があると考えられるとしている。このことから、趣味や好みが共通していたり、自己開示できて信頼感を持てると感じたりする友人関係を持つことができれば、対人的疎外感は高くないと考えられる。そのような対人的疎外感を高めない良好な友人関係を築くためには何が必要か、さらなる検討が必要である。

引用文献

- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄編 心理検査学: 臨床心理査定の基本 垣内出版, 99, 573-581.
- 宮下一博 (1994). 疎外感の要因に関する研究: 家庭環境及び自己概念に焦点を当てて 千葉大学教育学部研究紀要, 42, 71-83.
- 宮下一博 (1998). 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 46, 27-34.

- 宮下一博・小林利宣 (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究, 29, 207-305.
- 永田有香・緒賀郷志 (2010). 中学生における愛着スタイルと対人的疎外感の関連 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 59, 159-168.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45, 456-463.
- 西野泰代 (2007). 学級での疎外感と教師の態度が情緒的な問題行動に及ぼす影響と自己価値の役割 発達心理学研究, 18, 216-226.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努(1992). 友人とかかわる 松井豊編 対人心理学の最前線 サイエンス社, pp.22-29.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 曾我部佳奈・本村めぐみ (2010). 青年期における大学生の主観的幸福感—その影響要因の探索に向けて— 和歌山大学教育学部紀要, 60, 81-87.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の变化— 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 鈴山可奈子・徳田智代 (2009). 夫婦関係および家族システムの機能状態が青年期の不安に及ぼす影響 家族心理学研究, 23, 1-11.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

Impact of Family Relationships and Friendships on Feelings of Interpersonal Isolation in University Students

-An Investigation Including the Impact of a Sense of Interpersonal Isolation on Subjective Feelings of Happiness-

MINAKO TAKEDOMI(*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

TOMOYO TOKUDA(*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study investigated the impact that family relationships and friendships had on university students' sense of interpersonal isolation and included the impact that a sense of interpersonal isolation had on subjective feelings of happiness. A questionnaire survey about feelings of interpersonal isolation, real and ideal friendships, family functions, and individual subjective feelings of happiness was distributed to 213 university students (78 men and 135 women). The results of a covariance structure analysis showed that having favorable real friendships negatively impacted feelings of interpersonal isolation and that a sense of interpersonal isolation negatively impacted subjective feelings of happiness. Negative impacts to a sense of interpersonal isolation were also observed from family function, but this impact was only minor. Results suggested that a sense of interpersonal isolation increases for university students who do not have favorable associations with real friends and that having a strong sense of interpersonal isolation decreases one's subjective sense of happiness.

Key Word : Feelings of Interpersonal Isolation, Friendships, Family Function, Subjective Feelings of Happiness, University Students